

昇降機 Column ②

今は昔“エスカレーターガール”

— 昇降機の“思いやり”職業 —

■コラムニスト、エスカレーター技術研究家 齋藤 忠一



■そもそも“エスカレーターガール”とは—

昇降機、とりわけエスカレーターの歴史話は、国立科学博物館の報告書「エスカレーター技術発展の系統化調査」(2009年、後藤茂)に詳しい。あとがきに筆者の名があるせいか、愛着もあって〈座右の書〉としている。

モノグサな筆者、年末にボンヤリとニュース番組を観ていたら、新宿の某デパートで〈40年ぶりにエスカレーターガール、期間限定で復活〉と、やっていた。

早速、冒頭の〈座右の書〉を開いてみた—1914年(大正3)の納入写真に、下部右側に男性1人、それ以降は女性だけで、1936年(昭11)には下部左側に1人、1956年(昭31)の某百貨店の上掲写真(〈座右の書〉)に掲載。日立提供)には下部左側に2人(1人は交代要員であろうか)、右側に1人が写っていた…別の文献には、乗り降りですまじきような乗客を手助けしたり、非常停止などのボタン操作をするのが仕事、とあった。

歴史ついでに、エスカレーターの原理的発想は1850年代のアメリカで誕生し、実用に至った原型は1900年(明治33)の「パリ万博」に出展されたのが始まりとされている。現在の建築基準法に相当する関係法令に、1926年(大正15)の〈警視庁昇降機取締規則〉があり「非常の際、直ちに動力を遮断し得る装置」として非常ボタンの規定がある。事実、日本で最古のエスカレーター文献と目される〈日立評論〉(1937年)には「ボタンは上昇下降停止の三点とし〜これ等の内、停止ボタンのみは露出して非常時の停止用に便ならしめ〜」の記載がある。

小欄の2回目は、“思いやり”の職業“エスカレーターガール”について述べてみたいと思う。

■“何とかガール”の表現が気になる

ところで、モノ書きの視点では、今ごろ「何とか、ガール」と表現してもいいのだろうか、の疑問が湧く。

幼時から〈男女平等〉を教わり、〈男女共同参画〉や〈男女雇用均等法〉で社会の仕組みを知り、32年前の〈男女7人夏物語〉で恋愛事情を胸に刻んだ…色々な変遷をたどって、男性前提のサラリーマン、それに職業婦人を指

すOLに対して、今では男女の別や年齢を感じさせない〈サラリーパーソン〉を推奨する時代になっている。そんな折も折、どこぞの大学(医科入試)で女性と浪人生に不利な扱いをしていた事件には驚いた。

■エスカレーターを初めて見たのは—

しみじみ考えてみた—エスカレーターに出会ったのはいつ頃だったろう。確か、小学生時分…秋田駅が木造だった頃、石原裕次郎主演〈男が命を賭ける時〉の撮影風景を見に行った時の老舗デパートだったと記憶している。その映画は、撮影地が秋田油田で新潟を舞台にした、船医役の裕次郎25歳時の作で、川地民夫と芦川いづみがからむアクションドラマだった。

秋田駅が2年後に改築されてステーションビルに替わった時は“エスカレーターガール”が数人いた。

1957年(昭32)頃、世の中では初代のコロムビアローズ(旧名 斉藤まつ枝 ご存命ならば86歳)が歌う「東京バスガール」(作曲 上原げんと 作詞 丘灯至夫)「若い希望も恋もある♪」が流行った—それから10年後、社会に出て悲喜交々、長いエスカレーター人生…かつて、“華”とされた職業も今はない。

■“思いやり”を職業にした生き方

“思いやり”を職業としたエスカレーターガール—こういう職種が今もあれば、事故が相当数減るだろうに…この職業、桜の花言葉「あなたに微笑む」を連想させてくれる。ほかの文献をめくっていると、エスカレーターガールが出現する前に“エレベーターガール”や“デパートガール”が存在した歴史を知ることができる。

本版には、昇降機業界で活躍する男女を紹介する記事〈エレ小町〉〈エレ侍〉に毎号新顔が登場し、それら若者に頼もしさを感じつつ読んでいる。“小町”も“侍”も、ハイカラ指向の昔ならば“エレベーター”を冠したうえで“ガール”“ボーイ”の表記だったと思う。

さて、季節は移ろい、春告草の花(梅)が過ぎて、北国からは桜満開の報も届いてきて嬉しい。